

札幌市立南の沢小学校の取組

(学校ホームページ <http://www.minaminosawa-e.sapporo-c.ed.jp/>)

1. 学校の実態・地域性等

学校教育目標「大自然とともに生き」を掲げる本校は、藻岩地区西側の台地に位置し、山・丘に囲まれた豊かな自然環境の中にある。

雪に関する学習活動は、「雪をとおして北国札幌らしさを学ぶ」をテーマとして、各学年のスキー学習、雪遊び（1、2年）、東海大学所有の広大な原生林「光風園」のスノーシューによる冬の自然観察（4年）、冬の滝野宿泊学習（5年）、全校雪踏み（学校行事）、雪と親しむ児童集会（児童活動）などを行っている。

その中から、外部機関と連携して行った2つの実践について報告する。

2. 実践 I

① 単元名

歩くスキーに挑戦しよう（5年 学校行事 3時間扱い）

② 目標

インストラクターの指導による歩くスキー体験活動を通して、冬のスポーツに親しみ、強い体をつくる。

③ 取組の様子

この学習は、札幌市観光文化局スポーツ部主催のクロスカントリースキーインストラクターを講師とした「歩くスキー出前授業」を利用し、冬の滝野宿泊学習において行う予定であった。しかし、今年度、ヒグマの出没により滝野宿泊学習での野外活動が制限されたことを受け、青少年山の家より用具を借り受け、本校グラウンドで実施した。



まず、体育館で歩くスキーの歴史や用具の名称、着脱の仕方などの説明を受けた後、3学級を6班に分け、それぞれにインストラクター1名がつき、体験学習が始まった。

児童は、専用の靴を履き、体格に合ったスキー板、ストックを選び、グラウンドに出た。ほとんどの児童が歩くスキーは初体験とあって、靴をスキーに装着できずいたり、踵が離れる不安定さに戸惑ったり、平地であっても転倒したりする場面が見られた。

それでも、インストラクターの後をついて 20mほどの直線を何度も往復するうちに、足元を見ながら恐る恐る歩いていた子どもも次第に慣れ、笑顔が見られるとともに、ストックの使い方も徐々にリズムカルになってきた。

小休憩には、真冬の曇り空の下にもかかわらず、上着を脱いで涼む子や腕まくりをする子が続出する様子から、子どもたちが集中して活動したことがうかがえた。



平地滑走の次は、築山の斜面に挑戦。アルペンスキーと異なり、滑走面に彫られた溝のため、上りは難なく進むことができる。しかし、下りは、細い板と固定されていない踵のため、初心者にとっては不安定



極まりない。なかなか滑り降りることができない児童に、インストラクターは「ひざをしっかりと曲げること」「遠くを見つめること」の二点を指示し、優しく励ましながら指導してくれた。この指導により、多くの児童が、滑り降りるたびにコツをつかみ、すぐに上達した。

終盤には、インストラクターがデモンストレーションを行い、クラシカル走法、フリー走法の違いを教えていただいた。体験学習の最後にはまとめとして、班対抗のレースを楽しんだ。中には、デモンストレーションで見たフリー走法を試す児童もおり、注目を浴びていた。

④ 実践のまとめ ～歩くスキーの魅力を実感した3時間～

学習を終えたばかりの児童から次のような感想を聞くことができた。「初めて歩くスキーをしたので最初は難しかったけれど、どんどん練習しているうちにリズムが良くなり、早く滑ることも少しできるようになった。」「インストラクターが細かく教えてくださったので、始めは難しかったけど、どんどんできるようになった。」「インストラクターがいなかったら、歩くスキーをこんなに楽しむことはできなかった。」



3時間という限られた時間ではあったが、児童は新たな冬のスポーツに触れ、その楽しさ、魅力に十分浸ることができたのである。5年生は、この後、歩くスキーの心地よい疲れの中、給食をとり、青少年山の家に出発した。

滝野での屋外活動が制限され、実施が危惧された歩くスキーであるが、札幌市観光文化局スポーツ部のご厚意により出前授業として実施することができ、とても有意義な活動となった。

3. 実践Ⅱ

① 単元名 「光風園の冬～スノーシューを履いて～」

(4年 さわっ子タイム〈総合的な学習の時間〉8時間扱い)

② 目標

スノーシューを履き、冬の光風園の動植物の様子を観察しよう。

③ 取組の様子

活動場所の「光風園」は、本校グラウンドの20倍以上の広さを有する東海大学札幌校舎所有の広大な広葉樹林で、湧水が流れ、エゾリス、シジュウカラ、オオウバユリなど、多くの動植物が生息している。本校4年児童は、さわっ子タイム(総合的な学習の時間)で、年4回、春夏秋冬の光風園を訪れ、四季折々の自然の変化、動植物の様子を観察する。

今年度の春、夏、秋の学習では、次のような動植物の様子を観察することができた。



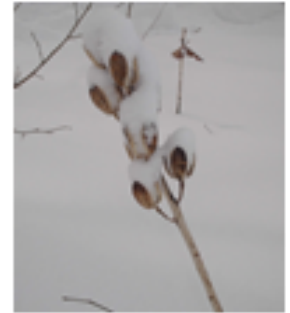
	春	夏	秋
植物・キノコ	<ul style="list-style-type: none"> ・ミズバショウ ・エゾエンゴサク ・エゾノリュウキンカ ・クサソテツなど 	<ul style="list-style-type: none"> ・オオウバユリ(蕾) ・ヒメジオン ・ミヤマキンポウゲ ・アカナラなど 	<ul style="list-style-type: none"> ・オオウバユリ(種) ・ヒトヨタケ ・ヨーロッパトウヒ ・ヘクソカズラなど

鳥・動物・昆虫	<ul style="list-style-type: none"> ・コガラ ・コゲラ ・ウグイス ・ヤマガラなど 	<ul style="list-style-type: none"> ・ミンミンゼミ ・アカエゾゼミ ・オニヤンマ ・アマガエルなど 	<ul style="list-style-type: none"> ・シジュウカラ ・トノサマバッタ(幼虫) ・アオイトトンボ ・オカダンゴムシなど
---------	--	--	---



単元の最終となる冬には、深い雪の中、スノーシューを履いて活動する。例年スノーシューは、さっぽろ健康スポーツ財団から借用し、使用している。

野外での活動の前に、児童は、「オオウバユリは倒れて雪の下になっている」「木々の葉は枯れ落ち、幹や枝だけが目立っているだろう」「生き物は見当たらない。足跡は見えるかもしれない」など、様々な予想を立てて当日に臨んだ。



園の入り口でスノーシューを履き、いざ出発。長靴のまま雪に踏み込んでみた児童は、スノーシューの利便性を実感していた。

児童の目にいきなり飛び込んできたのは、木の枝を移動するエゾリス。こちらをうかがう可愛い姿に歓声が上がった。雪の上には点々と足跡が続いていた。エゾリスの他にもキツネなどの足跡を認めることができた。



雪面からいくつも顔をのぞかせていたのは、枯れたオオウバユリ。背は高くても倒れて雪の下になっているだろうという予想は見事に外れ、デジカメで撮影する児童の輪ができた。

「花が咲いている！」という声上がり、近くによると、ツルアジサイの実と花卉がドライフラワーのようになり、大木に絡んでいる様子を見ることができた。

スノーシューに慣れてくると、誰も足を踏み入れていないところを選んで歩く児童が増えてきた。ちょっと油断し、後ずさりしようとする、スノーシューの踵部分が雪に刺さり、転倒する。しかし、ふかふかの雪に倒れこむ感覚は楽しく、何人もが故意に大の字になった。



耳を澄ますと数種類の鳥の鳴き声が聞こえた。その姿も確認しようと、シラカバやアカナラの木々を見上げる児童たち。「いたっ！」という声の先を見つめると、枝から枝へ飛び移るシジュウカラの姿があった。腹が赤く、青黒い羽をもったヤマガラを見つけたグループもあった。



そのほか、雪がちょこんと腰かけていたサルノコシカケ、数えきれないとげを身にまとったタラの木、鳥の巣のように見えるヤドリギ、雪上に黒く目立った小動物の糞、上空を旋回するトンビ、ほんのり膨らんだ木々の新芽など、多くの発見ができた2時間半となった。

④ 実践のまとめ ～厳しさの中で確かに息づく森林の冬～



「冬には野鳥の声は聞こえないと思っていたけれど、鳴き声が聞こえて驚いた。」「春、夏、秋とは違い、葉っぱがなかったので空がはっきりと見え、鳥もよく見えた。」「オオウバユリが秋と同じ状態だった。」「他の季節と違い、足跡がよく見えた。」「大きな木に絡まるツタの様子がよくわかった。」教室に戻った児童は、発見した動植物の様子、足跡の形などを図鑑と見比べながらワークシートに書き記した。

厳しい冬。一見、殺風景なモノトーンの世界の中でも、確かに息づいている森林を十分に実感することができた。また、スキーやそり遊びだけではなく、「雪の中を歩く」という活動も冬の楽しさ、魅力の一つであることに気付いたことも大きな収穫の一つとなった。

4. 研究のまとめ

今回報告した2実践は、青少年山の家、札幌市観光文化局スポーツ部、東海大学、さっぽろ健康スポーツ財団という4つの外部機関に協力いただき、連携しながら行うことができた。学校だけでは限られてしまう活動も外部機関と連携を図ることで、その教育効果は大きく高まることを再認識できた。

課題として、次の2点を挙げる。

まず、歩くスキーについて。昨年度と同様の課題となるが、市観光文化局スポーツ部によるインストラクターの派遣事業の実施回数の拡充を挙げる。専門家による指導はこの実践において不可欠である。

次に、冬の光風園の自然観察について。今年度までスノーシューを上記団体から無料で借用しているが、次年度より有料となる。本校の特色の一つであるこの活動を次年度以降も継続できるよう、青少年山の家からの借用や「学校の夢づくり支援事業」での購入など、様々な方法を探っていきたい。

2つの実践は、つらい、厳しいと感じる札幌の冬の負の印象を、全く逆の楽しい、素晴らしいと感じさせるものである。ふるさと札幌のよさを実感できる意義のある学習活動と考えている。

また、歩くスキーやスノーシューの使用は、冬季の運動不足により体力低下が懸念される札幌の児童にとって、「雪かき汗かきチャレンジ」などと併せて体力づくりのための有効な手段となる。

本校では、将来的にスノーシューを常備したいと考えている。学習活動だけではなく、休み時間にグラウンドなどで児童が日常的に使用できるようになると冬の体力づくりの効果は絶大であり、「未来を切り拓く人間性豊かで創造性あふれる自立した札幌人」の育成に結び付くものとする。

今後も、今年度の研究の成果を生かしながら、本校の教育課程における雪に関する学習活動の位置付けをさらに検討し、より実りある活動を推進していきたい。